

G-03

汎共生の夢——パウル・カンメラーの科学思想から

相馬 尚之（東京大学大学院総合文化研究科）

まずパウル・カンメラーがどういう人物かということですが、彼は20世紀初めにウィーンを中心に活躍した生物学者です。特に獲得形質の遺伝をめぐり、ダーウィン主義の科学者らと争ったのですが、第一次世界大戦後は特に生物学を社会に応用しようということを強く訴えました。その例が汎共生であります。

共生とはある生物の他の生物が互いの利益のために共同生活を営むことです。例えばイソギンチャクとヤドカリとかが有名ですが、彼は動物の共生を人間社会にも拡張しよう、ということを試みました。つまり生存闘争と汎共生が進化の動力源であるとした、社会ダーウィニズムの一つの例を出したわけです。

なぜ彼がこのような事を言ったかということ、それにはドイツ一元論というものが考えられます。一元論というと難しいのですが、要するにすべてのモノはあるモノであるとして、人間と無機物とか石とかもまるで同じ法則に従うだろうと、というようなことを確信し、彼はその人間とか粒子とかにも共通して通用する法則を探求しました。このような有機界と無機界、動物と植物、あるいは人間とその他、こういったものの区別を設けない、普遍的な科学を想像し、それを追い求めた、ということが彼の汎共生の背景にあります。

これを考えてみると、このカンメラーの汎共生にとって重要なのは、有機界、無機界、人間を含めあらゆる存在が淘汰と共生に従うことです。人新世の時代、人間と自然といったものを同じような舞台におこうとする時代にあって、民主主義、独裁といった概念は、人間社会を越えてあらゆる自然に拡張される可能性があります。これはかつて自然科学が、進化論がその人間社会に応用したのとは逆コースをたどるような、人文科学的な科学の傲慢のくり返しになってしまうのではないのでしょうか。

このような危険を提示して私の発表を終わります。

汎共生の夢——パウル・カンメラーの科学思想から——

東京大学大学院総合文化研究科/多文化共生・統合人間学(IHS)プログラム 修士課程2年 相馬尚之

01 パウル・カンメラーとは何者か？ (Paul Kammerer 1880-1926)



- ・20世紀初めにウィーンを中心に活躍した生物学者
- ・サンショウウオオオヤカエルを用いた繁殖実験により、獲得形質の遺伝を示したと主張し、新ダーウィン主義者と激しい論争
- ・第一次世界大戦後、広く社会問題に生物学の成果を応用することを自覚して活動



サンショウウオの色の遺伝

- ・1926年、サンバカエルの標本にインクを注入していたとの捏造疑獄から評判は完全に失墜し、同年自殺
- ・異端の科学者？権威的な新ダーウィン主義や反ユダヤ主義の犠牲者？？エビジェティクスの先駆者？？

02 汎共生 (Pansymbiose) の夢

021 共生

- ・共生とは、ある生物と他の生物が、互いの利益のために共同生活を営むこと
- 例) ヤドカリとイソギンチャク
- ⇒共生は、生存競争のみにより進化を説明しようとする、新ダーウィン主義に対する反例
- 例) クロボトキンの「相互扶助」



ヤドカリとイソギンチャク

022 「汎」共生

- ・カンメラーが目指していたのは、動物界における原理を植物界や細胞、そして人間社会へと、あらゆる次元に拡張すること
- ・「汎共生」によってカンメラーは、共生は「動物」同士の間だけで生じるのではなく、動物と植物、細胞、そして人間にも、普遍的にみられる現象であると主張



ツェルン細胞と細菌

ただ驚かすだけでなく、動物と動物を、真なった距離でお互いを隔てているのは、ただ驚かす空間の距離のみである。

(Kammerer(1918), S. 24)

ただ驚かすだけでなく、動物と動物を、真なった距離でお互いを隔てているのは、ただ驚かす空間の距離のみである。

023 汎共生の功罪

- ・カンメラーは共生を重視し、当時西欧社会で流行していた人間社会をも生存競争に基づく進化論で説明しようとする。単純な社会ダーウィニズムに反対
- ・しかしカンメラーの目的は、共生の原理によって苛烈な生存競争の原理を和らげることであり、生物界の法則の人間への拡張には賛成
- ⇒社会ダーウィニズムの拒絶としての「汎共生」

03 ドイツ一元論の野望

- ・ドイツの生物学者エルンスト・ヘッケル(Ernst Haeckel 1834-1919)により広められた思想。
- 「実体」一元論を主張し、生命に特有の力を認める生氣論や目的論を二元的と批判
- ・カンメラーら一元論者は、微粒子から人間社会まで機械的に説明できる同一の原理の存在を確信例) 生物における螺旋表裏



(左) 植物の螺旋軸と、動物子のプランクトン運動軸の螺旋
(右) 葉巻巻貝に於ける卵の螺旋の表裏の螺旋

- ・一元論的世界観のもとでは、あらゆる存在が同一の原理に従う。物理学、化学、生物学の諸法則は、普遍的「実体」法則の部分法則である
- ⇒人間の、他の存在との質的相違は否定される

私たち一元論者は、私たちを他の自然と一つと感じることに馴染んでいる。私たちの自尊心によって、他の活ける世界のように、同一の法則性支配されているということは、耐えがたいことではない。そう、私たちは、その高みから神のゆがんだ欲望へと墜落したこともよしも、誰に似た祖先から今日の高みに戻ったことを誇りに思う。
(Kammerer(1913a), S. 23)

- ⇒有機体の特種性を押し、有機界と無機界、動物界と人間等を区別しない、普遍的「科学」の夢想

04 “科学”主義の驕慢

- ・カンメラーの「汎共生」にとって重要だったのは、一元論的世界観のもと、人間も含め、あらゆる存在が法則と共生の原理に従うこと
- ⇒社会ダーウィニズムのような、“科学”の増長の一画
- ⇒専門の科学は本来、有効な領域が制限されている

●人新世の啓代

- ⇒もともと人間社会に用いられていた「民主主義」や「独裁」といった概念のなかで、あらゆる自然環境や生物が含まれるようになる可能性
- ⇒アナロジーや用語の乱用に基づき、万物に適用する法則を採る“科学”に向かう危険
- 動物や木々、環境全体を範疇に収めることは、人間の特種性を否定し、環境問題を解決に導くのか？
- それとも、かつて普遍性に優れた自然科学がその積分を超えようとして陥ったのは逆ユダヤをたどる、“科学”の平準の繰り返しなのだろうか？

主要参考文献

- Kammerer, Paul. *Sind wir Sklaverei der Vergangenheit oder Weltmeister der Zukunft?* Wien und Leipzig: Ansgarverlag-Verlag Brüder Schönlank, 1913a.
 - “Pansymbiose,” *Die Naturwissenschaften* 1 (1913b): 1272-1275.
 - “Kampf ums Dasein und Gegenwärtige Höhe,” in: *Erkenntnis*, 10(1926), biologische Unterabteilung, und andere Aufsätze aus schwerer Zeit. Wien und Leipzig: Ansgarverlag-Verlag Brüder Schönlank, 1918. 5.
 Pflüger, Karl. “Über die ungerichtete Bewegung lebender Tiere.” *Pflüger's Archiv für die gesamte Physiologie des Menschen und der Tiere* 151 (1913): 401-405.